

カラマツおが粉は、タモギタケなどの栽培に用いることができます。  
適用できるきのこの種類の拡大が期待されています。

### タモギタケの培地として

林産試験場の開発品種を用いたタモギタケの栽培結果を表 1 に、道内企業によるカラマツを用いた実生産の様子を写真 1 に示します。カラマツおが粉単独では、ダケカンバおが粉より栽培期間がやや延びるものの収量はダケカンバと同等でした。さらに、カラマツおが粉に消石灰を培地重量の 0.2% 添加すると、ダケカンバおが粉に比べ収量が 20% 増加しました。

カラマツおが粉は、タモギタケ培地として十分に使用可能であると考えられます。

表 1 タモギタケの栽培結果  
(1990年代後半実施)

おが粉の種類	消石灰 <sup>注)</sup> (%)	収量 (g/瓶)	収量比	栽培日数 (日)
ダケカンバ	0	79.4	100	18.2
カラマツ	0	79.1	100	20.1
カラマツ	0.2	95.9	121	18.9
トドマツ	0.2	73.0	92	23.1

注) 培地重量当たりの添加率



写真 1 タモギタケの企業生産

### 「えぞ雪の下」(野生型エノキタケ)の培地として

培地添加物として米ぬか 85g、水分64%の条件でカラマツおが粉を用いたところ、850ml容栽培瓶当たり 180gの収量が得られ、培地として十分に使用可能と考えられます。写真 2は試験時の発生状況です。

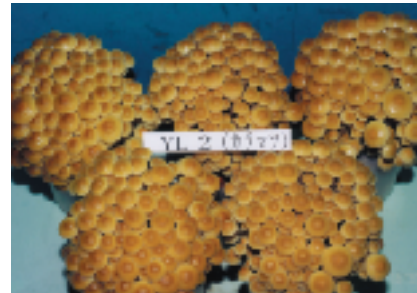


写真 2 「えぞ雪の下」の発生状況

表 2 道内の食用きのこ栽培におけるおが粉の使用状況と試験結果

きのこの種類	主に使用されているおが粉	カラマツおが粉	
		生産事例 <sup>1)</sup>	栽培試験 <sup>2)</sup>
タモギタケ	針葉樹		
えぞ雪の下	針葉樹		
エノキタケ	針葉樹		
ナメコ	広葉樹		
ヒラタケ	針葉樹		
マイタケ	広葉樹		×
ブナシメジ	針葉樹		
菌床シイタケ	広葉樹		

1) : 生産が行われている, - : 生産は行われていない

2) : 実用性が高い, : 使用可能,  
: 条件により使用可能, × : 使用困難, - : 検討中

(生産技術科)

### カラマツの散水处理と利用に適した品種の育成

カラマツおが粉は、安価で入手しやすい材料として、北海道内ではきのこ生産の一部に使用されています。紹介した事例は無処理のおが粉で行いましたが、カラマツに多く含まれているフェノール成分等の抽出物(ヤニなど)はきのこの生育を阻害することがあるので、商用生産に使用する場合は6ヶ月以上屋外散水堆積した後栽培すると生育が良くなります。

当該を含む試験研究機関の過去の結果では、カラマツおが粉を十分に散水堆積して阻害成分を除去することで、ヒラタケ、ブナシメジが栽培できることが分かっています。条件によってはエノキタケ、ナメコも栽培できます(表 2)。

これまで針葉樹のおが粉は、エゾマツ・トドマツの混合物を利用することが主流でしたが、きのこの菌種を限定すればカラマツも十分に利用可能と考えられます。さらに、当該では新しくブナシメジやマイタケにおいてもカラマツを培地に利用できる品種の育成に取り組んでおり、今後、カラマツおが粉の使用量が増えると期待されます。